

鹿児島県総合教育センター

令和元年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

授業が変わる！生徒が変わる！！
学びの深まりを実感する国語科学習指導
—「学びをつなぐ振り返りシート」の活用を通して—

南大隅町立根占中学校
教諭 中村 恵理

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	2
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題に関する実態分析と考察	
(1)	生徒に対する実態調査等の結果と分析	3
(2)	調査結果等を基にした本研究の方向性と授業づくりの視点	5
2	研究主題についての基本的な考え方	
(1)	学びの深まりについて	5
(2)	「学びをつなぐ振り返りシート」について	6
3	考えの変容を自覚し、学びの深まりを実感する国語科学習指導の手立て	
(1)	学びの方向性を見通すための単元の学習課題と自分の「問い」の設定	7
(2)	必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫	7
(3)	学びの価値付けができる振り返りの工夫	9
4	検証授業Ⅰの実際と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	10
(2)	検証授業Ⅰの指導の工夫と考察	12
(3)	検証授業Ⅰにおける生徒の表現例	16
(4)	検証授業Ⅰの成果と課題	17
(5)	検証授業Ⅰの課題を踏まえた検証授業Ⅱの留意点	17
5	検証授業Ⅱの実際と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	18
(2)	検証授業Ⅱの指導の工夫と考察	21
(3)	検証授業Ⅱにおける生徒の表現例	24
(4)	検証授業Ⅱの成果と課題	25
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	26
2	今後の課題	26

※ 参考文献

I 研究主題設定の理由

今日は、急激な少子高齢化や情報化、グローバル化の進展や技術革新等により、未来の予想が困難な成熟社会を迎えている。その中を生きる私たちには、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。学校教育においても、生徒が、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題解決をしていくことや、多くの情報を見極め、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況の中で目的を再構築することができるようになることが求められている。これらを踏まえ、改訂された中学校学習指導要領の総則において、育成すべき資質・能力を明確にすると共に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されることになった。このような資質・能力の育成を目指した授業改善を通して、学習内容と人生や社会の在り方を結び付けて深く理解し、生涯にわたって能動的に学び続けることができる生徒を育成していく必要がある。

これまで、本校の国語科学習では、言語活動を通して自分の考えを言葉で表現できる生徒の育成を目指してきた。生徒は、自分の考えを意欲的に表現する一方で、その考えが明確な根拠に支えられていないことや、考えを伝える言葉が適切かを吟味できていないことに課題があると感じている。加えて、生徒が言語活動を通して、どのような力が身に付いたのかを客観的に評価して、学習の成果や価値を実感したり、身に付けた力を実生活で活用したりすることができていない現状もあった。

また、平成31年度全国学力・学習状況調査の結果から、本校は「読むこと」の領域において、正答率が低く、特に「文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉える」ことに課題があることが明らかになった。全国的にも、国語科の課題として、「文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをもつことや、文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉えることに課題がある。」「自分が伝えたいことの根拠として読み手に分かりやすいように書くことに課題がある。」と挙げられている。その要因の一つに、国語科の学習が活動中心になりがちで、教師が育成を目指す資質・能力を明確にしていなかったために、授業を通して何ができるようになったのかがはっきりしていなかったということがある。生徒は、1単位時間又は単元を通して何が身に付いたかを明確にできないまま授業が進んでしまい、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚して、学びの深まりを十分に実感することができていなかったのではないかと考えた。そこで、生徒が学びの方向性を見通し、自分の「問い」を立て、その「問い」を解決することを通して、観点を明確にして国語科の学びを振り返ることができれば、何を学んだかが明確になり、学びの深まりを実感することができると考えた。

このような時代の要請や課題を背景に、本研究では学びの深まりを実感する国語科学習指導に取り組むことにした。学びの深まりとは、言語活動を通して課題を解決することで、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚し、学びが価値付けされることと捉える。そこで、生徒が学びの深まりを実感する手立てとして、「学びをつなぐ振り返りシート」を開発し、学習過程に位置付け、活用することにした。この「学びをつなぐ振り返りシート」とは、1単位時間の学びについて観点を明確にして振り返り、学びの成果を確認するとともに、単元を通して身に付けた力を振り返り、考えの変容(学びの広がりや深まり)を自覚して、その学びを次の学びや実生活につなぐシートのことである。このシートを活用して生徒が学びの深まりを実感するためには、五つの学習過程に3条件を位置付けた授業設計が必要であると考えた。五つの学習過程とは、①学習課題を確認、②学習課題の追究、③考えの形成、④考えの共有、⑤考えの変容の自覚であり、3条件とは①学習課題、②言語活動、③振り返りである。五つの学習過程の中で、生徒が単元の学習課題を確認し自分の「問い」を立てて、必要感・必然性をもたせる言語活動を通して、学びの価値付けができる振り返りを継続させることで、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚し、生徒が学びの深まりを実感できると考えるからである。3条件を相互に関連付けるためには、まず、単元の学習課題を通して、学びの方向性を見通すことができる必要がある。次に、解決すべき単元の学習課題が必要感・必然性をもたせる言語活動とつながる必要がある。最後に、その言語活動を通して、生徒が行う学びの振り返りは、本時の学習内容の確認に留まらず、次の時間や単元の新たな学びとつながり必要がある。このように3条件を相互に関連付け

た授業を通して、学びをつなぐことができれば、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚でき、学びが価値付けされ、学びの深まりを実感できるのではないかと考えた。また、このことは、学習指導要領が示す「学びに向かう力、人間性等」の育成を図ることにもつながると考える。

これらのことから、国語科の学習指導において、「学びをつなぐ振り返りシート」を学習過程に位置付け活用すれば、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚でき、学びが価値付けされるので、学びの深まりを実感できると考え本主題を設定した。

II 研究の構想

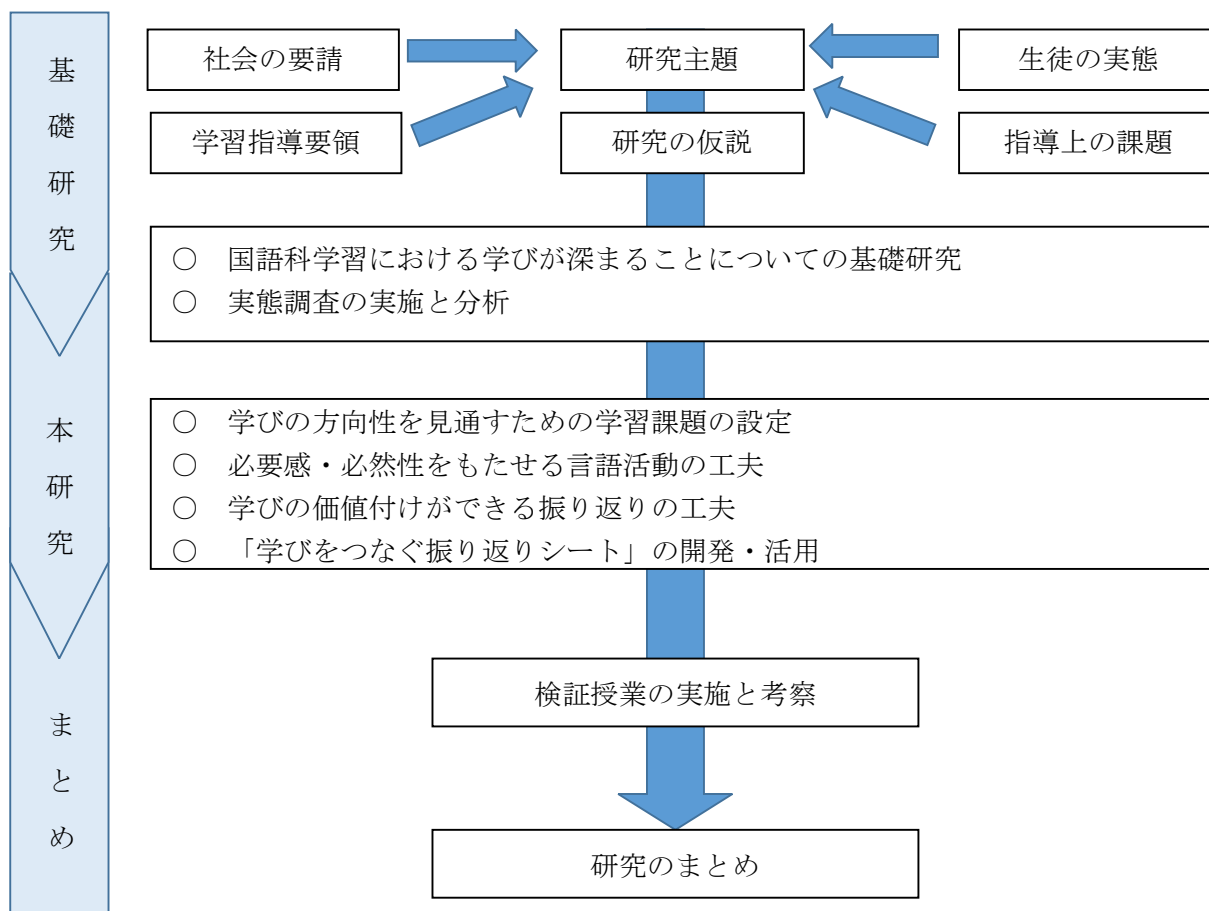
1 研究のねらい

- (1) 学びの方向性を見通す単元の学習課題と、生徒が解決する自分の「問い」の立て方について明らかにする。
- (2) 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫について考察・検証する。
- (3) 学びの価値付けができる振り返りについて考察・検証する。
- (4) 「学びをつなぐ振り返りシート」を開発・活用した指導の在り方を明らかにする。
- (5) 検証授業を行い、本研究の成果と課題を明らかにする。

2 研究の仮説

国語科の学習指導において、「学びをつなぐ振り返りシート」を学習過程に位置付け活用することで、生徒は考えの変容（考えの広がりや深まり）が自覚できるので、学びを価値付けし、学びの深まりを実感できるのではないかと考えた。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題に関する実態分析と考察

(1) 生徒に対する実態調査等の結果と分析

ア 実態把握の概要

学びの深まりを実感する国語科学習指導の方向性を明らかにするために、「国語科の学習に関する意識」、「考えの形成に関する意識及び実態」の2項目について生徒の実態を把握し、分析することにした。なお、意識調査だけではなく、学力調査等の結果を併せて活用することで、生徒の実態と課題を多面的に把握できるようにした。

イ 実態調査等の実施方法

調査等の名称	実施の時期	調査等の対象
平成31年度全国学力・学習状況調査	2019年4月	南大隅町立根占中学校 第3学年(44人)
生徒の意識調査(アンケート)	2019年6月	南大隅町立根占中学校 第2学年(45人)

ウ 全国学力・学習状況調査の結果

表1 平成31年度全国学力・学習状況調査 調査結果 正答率(%)

区分	本校	県	全国
話すこと・聞くこと	65.9	66.2	72.8
書くこと	79.3	82.6	82.6
読むこと	58.5	68.8	72.2
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	63.4	66.2	67.7

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果(表1)を分析すると、本校は特に「読むこと」の領域において、平均正答率が低いことが分かった。その中でも、表2に示す問題の正答率が低いことと表3に示す問題の無回答率が高いことが明らかになった。

表2 平成31年度全国学力・学習状況調査 問題別調査結果 正答率(%)

問題番号	問題の概要	問題の趣旨	本校	県	全国
1一	「日本の文化の中には、海外でも広く知られているものがあります。……第一回は、弁当です。」について説明したものととして適切なものを選択する。	文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確に自分の考えをもつ。	48.8	58.9	63.9
1二	「海外に広がる弁当の魅力」で述べられている、弁当の魅力として適切なものを選択する。	文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉える。	39.0	56.5	61.5

表3 平成31年度全国学力・学習状況調査 問題別調査結果 無回答率(%)

問題番号	問題の概要	問題の趣旨	本校	県	全国
2三	話の流れを踏まえ、「どうするか決まっていないうこと」について自分の考えを書く。	話合いの話題や方向を捉えて自分の考えをもつ。	17.1	9.5	8.9
3二	広報誌の一部にある情報を用いて、意見文の下書きに「魅力」の具体例を書き加える。	伝えたい事柄について、根拠を明確にして書く。	14.6	7.5	7.9

これらの結果から本校の生徒には、考えの形成に課題があることが分かった。特に、根拠を明確にした考えをもつという趣旨の問題に対して、無回答率が全国や県と比較して高いことが明らかになった。このことから、国語科の学習指導において特に、根拠に支えられた考えの形成を図るための手立てをとる必要があると考えた。そこで、考えの形成に関して更に詳しく調査するために、本校において意識調査と分析を行った。

エ 考えの形成に関する意識調査の結果と考察

生徒全員が、「国語科の学習が社会で役に立つ」と肯定的に答えている（図1）。その理由として最も多かった回答は、「社会に出たとき、文章を書くことは必要だから」、「漢字が読めないと恥ずかしいから」というものだった。また、9割以上の生徒は「国語科で学習したことを、日常生活に生かしている」という問いに対して肯定的に答えた（図2）。

これらの結果から、多くの生徒が、「国語科の学習が生活や社会で生かされている」と感じており、国語科の学習の意義を理解していると考えられる。

生徒の意識調査から、7割以上の生徒は、国語科学習の中で、考えをもつことができている（図3）一方で、6割以上の生徒が実生活の場面等で、自分の考えが伝わらなかった経験があると回答していることが分かる（図4）。

これらの結果から、国語科での学習が授業の中で完結して、実生活の場面等で生かされていらないという意識の生徒が、多いことが分かる。その原因の一つに、国語科の学習を通して、生徒がどのような力を身に付けたかが曖昧で、学びの深まりを十分実感していないのではないかと分析した。

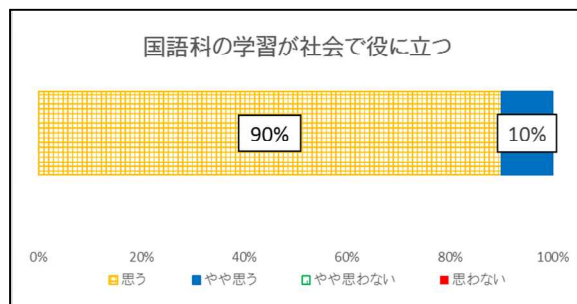


図1 国語科に対する意識調査①

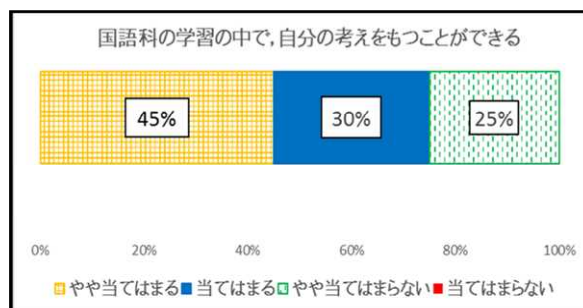


図2 国語科に対する意識調査②

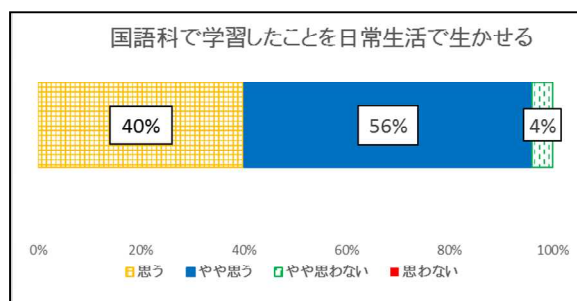


図3 「考えの形成」に関する意識調査①

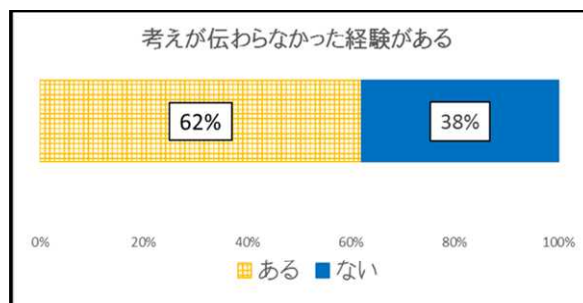


図4 「考えの形成」に関する意識調査②

(2) 調査結果等を基にした本研究の方向性と授業づくりの視点

全国学力・学習状況調査、本校で実施した考えの形成に関する意識調査の結果やこれまでの私の実践を振り返ると、言語活動を通した国語科の学習には意欲的であるが、言語活動が活動のみで終わりがちで、活動を通してどのような力が身に付き、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚しないまま授業が終わっている現状があると考えた。よって、国語科の学習の中で、生徒が考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚するために、次の3点を授業づくりの視点として研究を進めることにした。

- 1 学びの方向性を見通すための単元の学習課題の設定
- 2 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫
- 3 学びの価値付けができる振り返りの工夫

これらのことから、本研究では、生徒が、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し、学びが価値付けされることで、学びの深まりを実感し、国語科で得た学びを次の単元や他の教科、実生活に生かすことができる国語科の学習指導を目指していくことにした。

2 研究主題についての基本的な考え方

(1) 学びの深まりについて

本研究における学びの深まりとは、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し、学びが価値付けされることと捉え、研究を進めることにした。そして、国語科の授業で、生徒が学びの深まりを実感するためには、図5にある五つの学習過程に学びの深まりを実感する3条件を位置付け、相互に関連し合うような授業改善に取り組むことにした。この3条件とは、①学びの方向性を見通す学習課題、②必要感・必然性をもたせる言語活動、③学びの価値付けができる振り返りのことである。学びの深まりを実感する五つの学習過程と3条件の関係を明らかにしながら学びの深まりを実感する国語科学習指導について研究を進めていく。

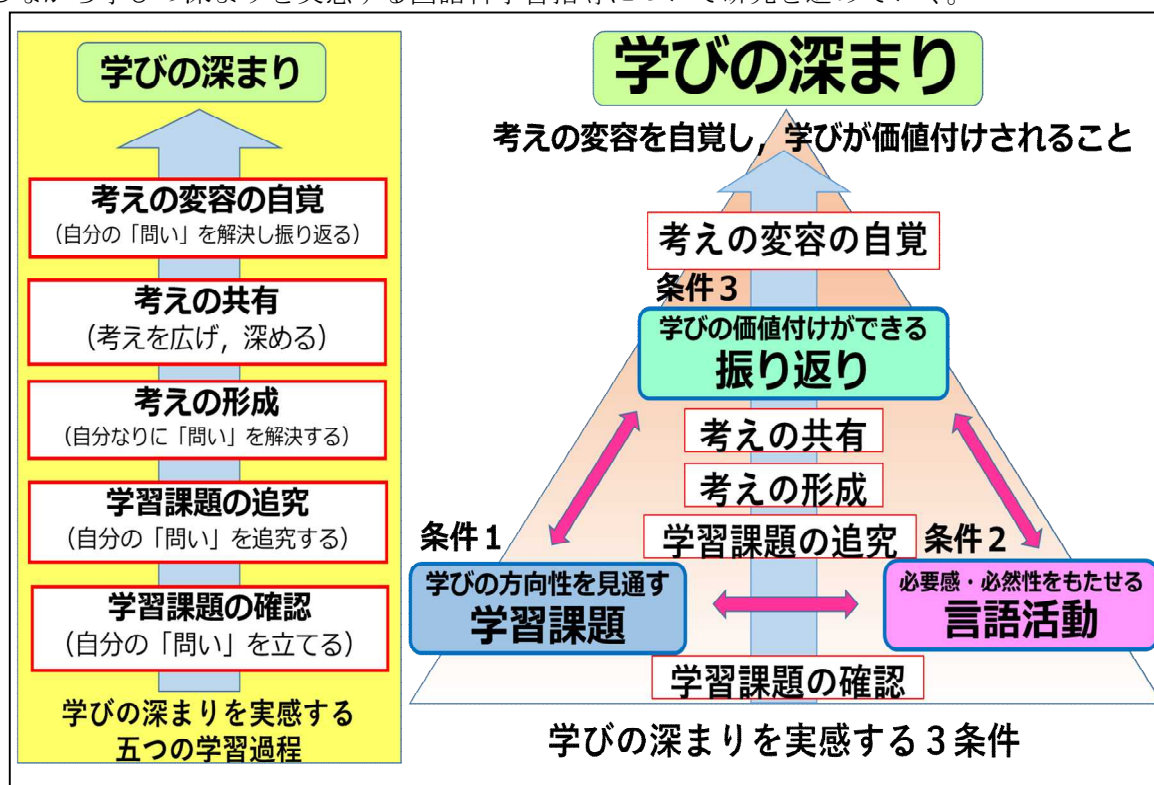


図5 学びの深まりを実感する五つの学習過程と3条件

表4 学びの深まりを実感する五つの学習過程

学習過程 (学習活動)		条件			学習活動のねらい	学習活動の内容
		1	2	3		
①	学習課題の提示 (自分の「問い」を立てる)	◎			単元の学習課題から育成を目指す資質・能力を生徒と教師が共有し、自分の「問い」を立てさせることで、学びの方向性を見通させる。	単元の指導事項と思考方法、言語活動を位置付けた単元の学習課題を確認し、単元の学習課題を解決するために一人一人が解決したい自分の「問い」を立て、学びの方向性を見通す。
②	学習課題の追究 (自分の「問い」を追究する)	○	◎		自分の「問い」について、構造や内容を把握させて、考えをもたせ自分の「問い」を追究させる。	自分の「問い」を解決するために、構造や内容を把握したり、精査・解釈を重ねたりしていく。
③	考えの形成 (自分なりに「問い」を解決する)			○	話や文章の内容について、自分の知識や経験と結び付けたり、関連付けたりしながら、根拠を明確にして考えの形成を図らせる。	思考ツールを活用して、思考の流れを整理し、可視化する。整理した思考を、自分の知識や経験と結び付けたり、関連付けたりしながら、根拠を明確にし、考えの形成を図る。
④	考えの共有 (考えを広げ、深める)		◎	○	考えの交流を通して、自分の考えを広げたり、深めたりして多面的・多角的な視点で考えの再形成を図らせる。	考えの交流を相互に行って、多面的・多角的な視点から考えを広げたり、深めたりして、考えを吟味する。
⑤	考えの変容 (自分の「問い」と解決を振り返る)		○	◎	考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し、学びの深まりを実感させる。	自分の「問い」と解決を振り返り、学びの価値付けを行う。 単元を通した学びを振り返り、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し、学びの深まりを実感する。

(2) 「学びをつなぐ振り返りシート」について

生徒が国語科の学習において学びの深まりを実感するためには、学びの履歴を残し、学びの振り返りを言語化することが必要であると考え、本研究では「学びをつなぐ振り返りシート」を開発し、活用することにした。この振り返りシートは、生徒が学びの方向性を見通して、生徒が自分の「問い」を立て、1単位時間又は単元を通した学びについて観点を明確にして振り返り、学びを価値付けしながら次の学びにつなぐシートのことである。ここで生徒が立てる自分の「問い」とは、単元の学習課題を解決するために、生徒一人一人が解決すべき課題であると捉える。この振り返りシートを活用するねらいは、生徒が立てた自分の「問い」を解決するために、生徒が学びの方向性を見通し、考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚しながら次の学びにつないでいくことである。この振り返りシートの活用を通して、生徒は国語科の学習に主体的に取り組み、学びを振り返りながら、学びの深まりを実感できるようになるのではないかと考えた。

3 考えの変容を自覚し、学びの深まりを実感する国語科学習指導の手立て

(1) 学びの方向性を見通すための単元の学習課題と自分の「問い」の設定

単元の学習課題を設定するには、次の3要素を位置付けることにした。

㉞	単元の指導事項	㉟	着眼点や思考方法	㊱	単元を通した言語活動
---	---------	---	----------	---	------------

そのねらいは、育成を目指す資質・能力を生徒と教師が共有し、生徒が自分の「問い」を立て、学びの方向性を見通すことである。このように3要素を踏まえることで、生徒はどのような言語活動を通して、どのような力を身に付けるかが明確になり、学びの方向性を見通すことができるようになる。また、単元の学習課題を解決するために、生徒一人一人に自分の「問い」を立てさせることにした。自分の「問い」を立てることで生徒は学びを自分のこととして捉え、生徒が立てた自分の「問い」を解決するため主体的に取り組めるようになると考えた。

(2) 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫

ア 評価の観点から明確にした言語活動のモデル提示と活用

本研究における、必要感・必然性とは、生徒が「こんなことができたなら〇〇できそうだ」、「こんなことをしてみたい。そのためには▲▲ができるようにならなくてはいけない。」と感じることと捉えた。そこで、単元の導入で言語活動のモデルを提示することが効果的であると考えた。なぜなら、言語活動のモデルを提示した際に、生徒が「自分もこんな表現をしてみたい」、「こんなことができたなら〇〇できそうだ」、「自分の考えを表現するために、端的な語彙を使えるようになりたい」と感じれば、言語活動の目的や価値を見いだすことができると考えたからである。また、その際に評価の観点を生徒に明確に示すことで、生徒はどのような力を身に付け、発揮する必要があるのかを理解することができる。さらに、教師が言語活動のモデルを提示することは、言語活動を通した生徒の思考過程を、教師自身が辿ることになる。そのため、思考が滞った生徒に対する具体的な支援の仕方が明確になり、指導の充実を一層図ることができると考えた。

イ 思考の流れを整理し、考えの形成を図るための思考ツールの研究

本研究では、考えの形成を図る手立てとして、思考ツール「ストーリーマップ」と「人物評ボックス」を活用することにした(図6)。具体的には思考ツールに、着目した言葉やその理由、自分の知識や経験との関係、自分の考え等、思考に必要なことを記述することで、思考を可視化し、思考の流れを整理できると考えた。生徒が思考の流れを整理し、考えの形成を図ることができれば、自分の考えをどのように表現すればよいのかが明確になるので、言語活動の目的や価値を見だし必要感・必然性をもつことができるのではないかと考えた。

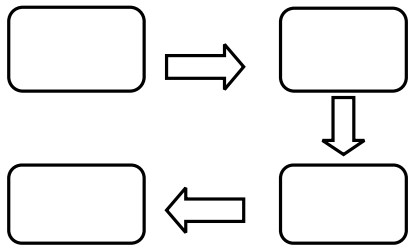
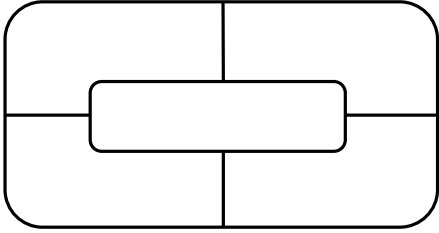
ストーリーマップ	人物評ボックス
文章等の基本的な構造を表したツール。言葉に着目して、根拠を明確にして読み深めることができる。	根拠となる言葉を抜き出し、課題を解決するためのツール。根拠を明確にして読み進めることができる。
	

図6 考えの形成を促す思考ツールの例

4 検証授業Ⅰの実際と考察

(1) 検証授業Ⅰの概要

ア 検証授業Ⅰの単元名及び実施学年等

単元名	短歌に込められた思いや心情を捉え、言葉を吟味して、鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書こう
教材名	短歌の世界・短歌十首（『現代の国語2』三省堂）
言語活動	短歌に込められた思いや心情を捉え、鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く
対象	南大隅町立根占中学校第2学年2学級において実施
実施時期	令和元年7月9日～13日

イ 言語活動設定の理由

本単元では、短歌を読むことで、短歌を声に出してリズムを味わいつつ、作者の思いや心情を捉え、自分の知識や経験と結び付けたり比較したりしながら、短歌の世界を想像し、読み味わうことをねらいとした。今回の授業で取り扱う短歌は、日常に溢れている光景を切り取り、三十一音という限られた音数で作者が言葉にこだわり、表現したものとなっている。本単元で取り扱うことにした「三十一音から始まるドラマ」を表現する言語活動は、言葉に着目し、短歌に込められた思いや描かれた世界を想像し、表現技法も用いながら一人称のドラマ仕立てで鑑賞文を書く活動である。この「三十一音から始まるドラマ」という鑑賞文を書く言語活動を通して、共感した言葉に着目し、自分の知識や経験と結び付けたり比較したりして短歌の世界を読み味わわせていきたい。

ウ 単元における評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語についての知識・理解・技能
○ 言葉がもつ価値を吟味し、認識して、自分の考えを伝えようとしている。	○ 共感した言葉に着目し、作者の思いや心情を捉えている。 ○ 作者の思いや心情と、自分の知識や経験と結び付けたり比較したりして、短歌の世界を想像している。	○ 表現の効果を考えて描写し、自分の考えが伝わる文章になるよう工夫している。 ○ 読み手からの評価を踏まえて、自分の文章のよい点や改善点を見だし、表現に生かしている。	○ 短歌の知識について理解している。 ○ 事象や行為、心情を表す語句に着目している。 ○ 表現技法に着目し、その働きを理解して使っている。

エ 評価規準を基にした判断基準の作成

評価規準	「短歌五首」で表れている言葉を吟味し、作者の思いや心情を捉えて内容を理解するとともに、自分の知識や経験と結び付けたり比較したりして、短歌の世界を想像し、表現技法や擬音語・擬態語、五感を使った心情や情景の描写等を取り入れた鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書くことができる。
評価の場面	<ul style="list-style-type: none"> 4時間構成の第2時でストーリーマップを書く場面 4時間構成の第3・4時で鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書き、他者と共有して考えを広げ深める場面
評価の対象	<ul style="list-style-type: none"> ストーリーマップ 鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」 毎時間行う「学びをつなぐ振り返りシート」

	「短歌を読み味わうこと」、「表現の仕方」から必要なものを選び、鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書いている。	
判断の要素	(1) 短歌を読み味わうこと ① 短歌の内容理解 ② 作者の状況 ③ 作者の思いや心情 ④ 知識や経験と結び付け、比較	(2) 表現の仕方 ① 一人称での表現 ② 短歌の言葉を使う ③ 相手意識 ④ 考えの共有
尺度	判断基準	
B	(1) 短歌を読み味わうこと ① 選んだ短歌について、共感した言葉を書いている。 ② 作者の状況について、短歌の言葉をもとに捉えている。 ③ 作者の思いや心情を、短歌の言葉をもとに捉えている。 ④ 共感した部分を中心に、自分の知識や経験と結び付けたり比較したりしている。 (①___ ②..... ③..... ④___)	(2) 表現の仕方 ① 一人称で書いている。 ② 短歌の言葉を使っている。 ③ 表現を工夫している。 【表現の工夫】 (倒置法、省略法、反復法等) ④ 視点に沿った推敲 (① ~③ <input type="checkbox"/> ④___)
【予想される生徒の鑑賞文 例】(選んだ短歌)		
みちのくの 母のいのちを 一目見ん 一目見んとぞ ただにいそげる 斎藤茂吉		
(1)②東北に住む母の命が危ないらしい。雨がしとしと降る夕暮れ、父からそう連絡が来た。		
(1)③遠くに住む私 ^私 は、驚いた。そして、すぐにでも母に会いたいと思った。(1)①母が生		
(2)①		
きている姿を一目みたい ^{一目みたい} と思った。母の声が聞きたいと思った。(1)④私の頭は母のことで		
(2)②		
いっばいだ。母に会いたい。とにかく会いたい。ただ母の元へ急いだ。		
母に会うために……。		
(2)③		
A	(判断基準Bに加えて) (1) 短歌を読み味わうこと ① 時代背景を捉えている。 ② 作者の状況を調べている。 ③ 心情や情景の描写を加えて表現を豊かにしている。	(判断基準Bに加えて) (2) 表現の仕方 ① 短歌の中で、感動の中心となる言葉を捉え適切に使っている。 【感動の中心】 ・ 区切れに着目する。 ・ 表現技法に着目する。 ② 情景描写を取り入れる。

オ 検証授業Ⅰの視点

ア 学びの方向性を見通すための単元の学習課題の設定
・ 育成を目指す資質・能力につながる単元の学習課題の設定
イ 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫
① 評価の観点を明確にした言語活動のモデル提示と活用
② 思考の流れを整理し、考えの形成を図るための思考ツールの研究
ウ 学びの価値付けができる振り返りの工夫
・ 「学びをつなぐ振り返りシート」の活用

カ 単元の指導計画（全4時間）

過程	活動のねらい	主な学習活動	時数	指導上の留意点
導入	○ 短歌を理解する。 ○ 短歌の鑑賞の仕方を学ぶ。	1 小学校の学習を想起しながら、短歌の知識を理解する。 2 鑑賞のポイントに着目しながら、鑑賞の仕方を学ぶ。 3 共通短歌を使い、鑑賞の仕方を理解する。	1	<ul style="list-style-type: none"> 解説型鑑賞文と創作型鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を比較させ、この学習を通して身に付けさせたい力を明確に示し、学習の見通しをもたせる。 短歌の鑑賞の仕方について、鑑賞のポイントを示しながら、理解させる。
展開	○ 短歌を鑑賞する。 ○ 推敲し合い、豊かな表現ができる。	4 五首の短歌から一首選び、ストーリーマップを使い鑑賞をする。 5 ストーリーマップを基に、鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く。 6 書き上がった鑑賞文を相互に推敲し合い、再考して清書する。	2	<ul style="list-style-type: none"> ストーリーマップを使い、交流を通して思考の広がりや深まりが生まれるよう支援する。 鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く条件を示す。 推敲のポイントを示し、相互に推敲ができるようにする。 交流のポイントを示し、活発な対話を促す。
終末	○ 鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」の発表会を通して、他者からも評価してもらい、考えの変容を自覚する。	7 自分と異なる短歌を選んだ者同士で発表会を行い、評価をし合う。 8 活動5で書いた鑑賞文と推敲や発表会を経て完成した鑑賞文を読み比べ、変容を自覚し、学んだことが生かせそうな場面を想像させ学びをつなげる。	1	<ul style="list-style-type: none"> 発表会を行い、他者との交流を通して、互いのよさを挙げさせる。 活動5で書いた鑑賞文と推敲や発表会を経て完成した鑑賞文を読み比べたり、発表会を通したりしての自分の考えの変容を自覚させる。 学んだことが生かせそうな場面を想像させ、学びつなげさせる。

(2) 検証授業Ⅰの指導の工夫と考察

ア 学びの方向性を見通すための単元の学習課題の設定

- 育成を目指す資質・能力につながる単元の学習課題の設定

本実践では単元の学習課題を三つの要素で構成することにした。本単元の学習課題は次のとおりである。

①短歌に込められた思いや心情を捉え、②言葉を吟味して、③鑑賞文「三十一音から始まるドラマを書こう」（①指導事項、②着眼点と思考方法、③言語活動）

単元の学習課題を通して生徒と教師が育成を目指す資質・能力を共有することで、学びの方向性を見通すことをねらいとし、毎時間確認をした。そうすることで、生徒は単元を通してどのような力を身に付けなければならないかが明確になり、主体的に学びに向かっていた。

イ 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫

(ア) 評価の観点を明確にした言語活動のモデル提示と活用

本実践では、短歌の鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く言語活動を設定した。導入の段階で、生徒に解説型鑑賞文と創作型鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」の二つを比較させ、「鑑賞のポイント（評価の観点）」を理解させることができた。こうして、教師が育成を目指す資質・能力につながる言語活動の具体的なモデルを生徒に提示することで、言語活動の目的や価値を見いだし、鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く必要感・必然性をもたせることができるようになる

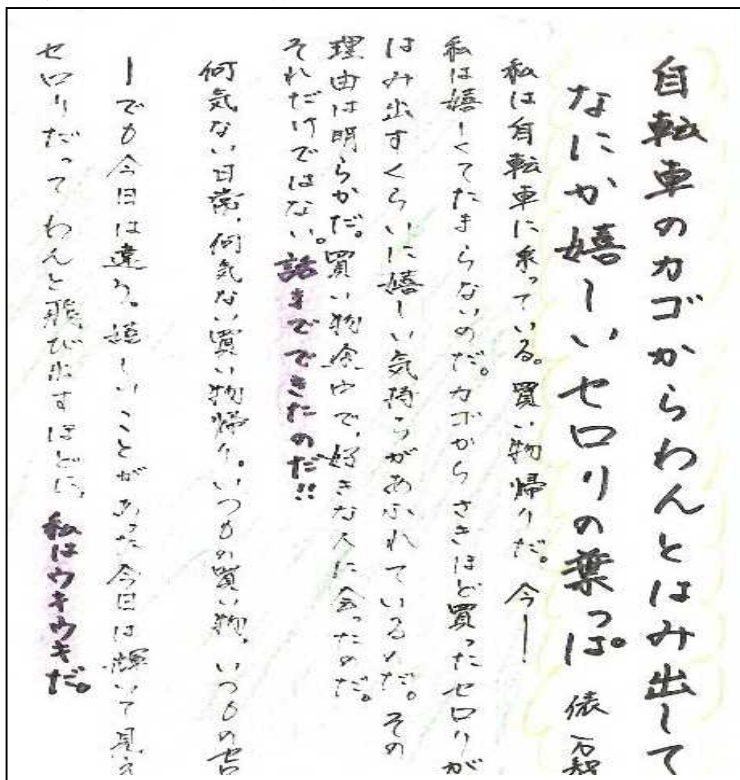


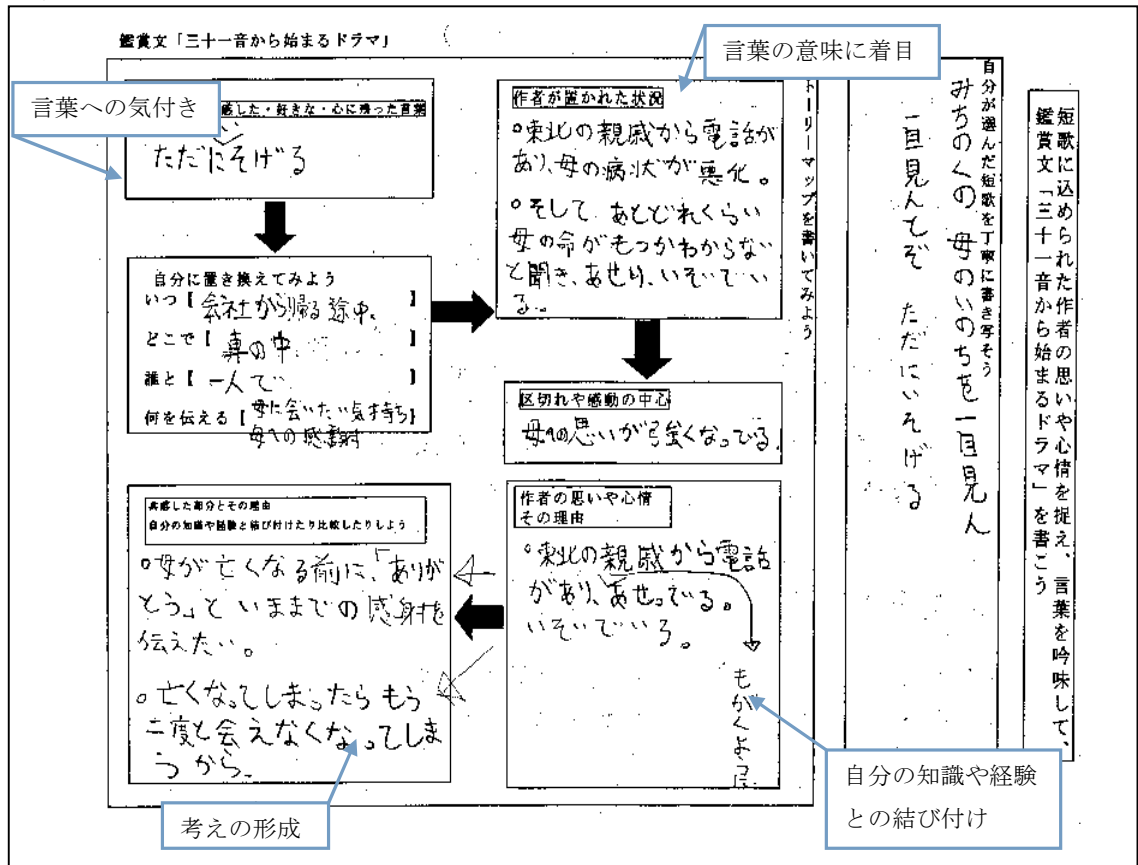
図 11 教師が提示した言語活動のモデル

感・必然性をもたせることで、国語科の学習に意欲的に取り組ませることができた。

(イ) 思考の流れを整理し、考えの形成を図るための思考ツールの研究

本単元では鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く言語活動を取り入れた。生徒は鑑賞文を書くに当たり、まず、共感した言葉に着目し、作者の心情を捉えた。次に、捉えた心情と、自分の知識や経験とを結び付けたり比較したりして、短歌の世界を想像した。最後に、自分の言葉で考えを表現し、他者と対話をする中で互いの考えの共通点や相違点等に気付き、自分の考えを広げたり深めたりした。具体的には、思考ツール「ストーリーマップ」を用いて、思考の流れを整理し、考えの形成を図った。短歌で使われている共感した言葉と自分の知識や経験とを結び付けたり、比較したりすることで、根拠を明確にして短歌の世界を想像できるようになり、鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書く必要感・必然性をもつことにつながると考えた。共感した言葉に着目し、言葉に込められた思いを捉えることで、日常に何気なく溢れている言葉にも一つ一つ心情が込められていることに気付いている生徒もいた。このツールは、言語活動のモデル提示で気付いた「鑑賞のポイント」を基に作られており、生徒は、ツールを活用しながら短歌で使われている言葉を根拠にして鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書くことできた。このツールの活用例は、次のとおりである（次頁図12）。

鑑賞例(1)



鑑賞例(2)

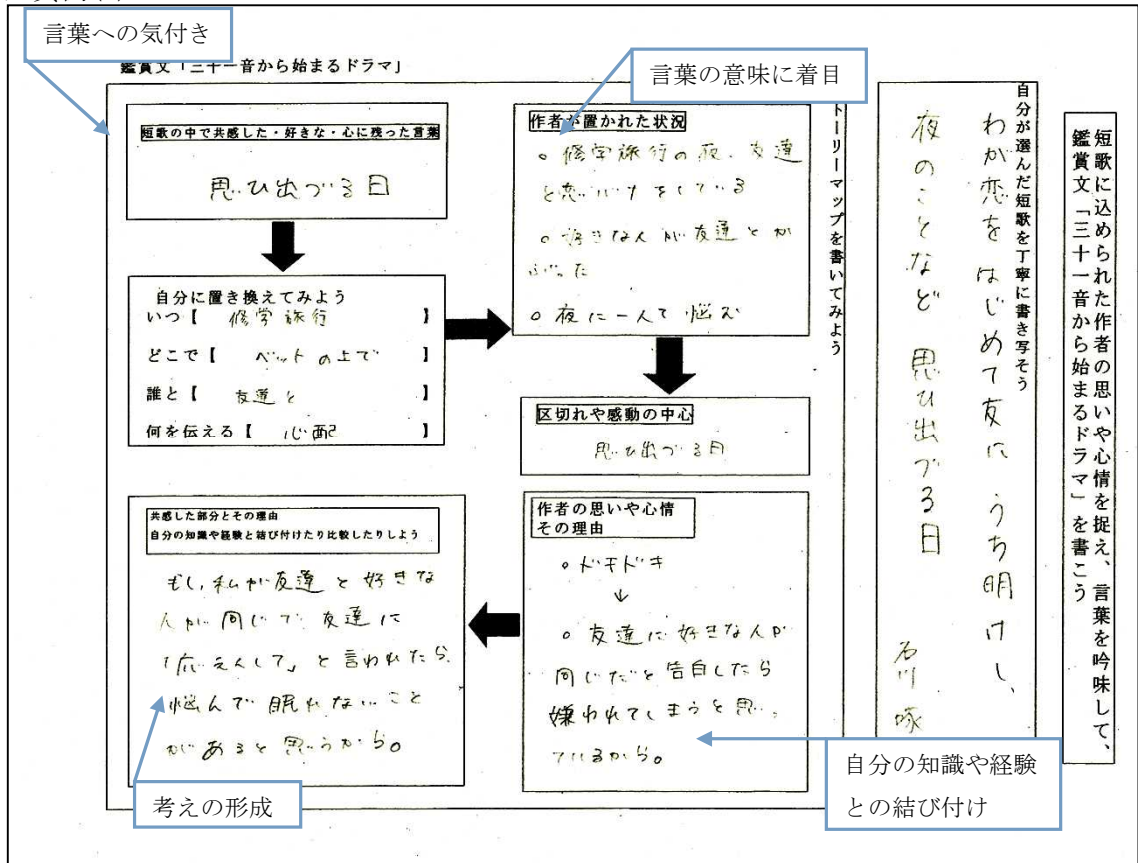


図 12 思考ツール「ストーリーマップ」の活用例

ウ 学びの価値付けができる振り返り

- ・ 「学びをつなぐ振り返りシート」の活用

毎時間の終末に行う振り返りでは「分かったこと」、「できるようになったこと」、「変わったこと」、「学びが生かせそうな場面」等の観点を教師が示し、生徒は学びの成果や疑問を確認した。例えば、「できるようになったこと」の振り返りでは、「自分の考えと短歌を結び付けることができた。」、「友だちの表現を参考に書くことができた。」という振り返りの記述があった。このことから、生徒は、根拠を明確にした考えの形成ができたという実感があり、他者との対話で考えの広がりや深まりを感じている様子が分かる(図13)。教師は生徒の振り返りに対して学びの価値付けを行い、学びの成果を確認したり、学びを不十分に感じている生徒には助言を記したりした。また、個人の振り返りを全体でも共有し、1単位時間の学びの価値付けも行った。

単元の終末では、生徒が単元を通した振り返りを行い、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚することで学びの深まりを実感することができた(図14)。例えば、「いろいろな表現技法を知れたので、これから文章を書く時に生かしていきたいです」と記述した生徒がいた。このことから、国語科での学びを次の学びに生かそうとする様子を見ることが出来る。また、「これって何を思って書いたのだろうって考えたりしたいです」と記述した生徒の言葉から、言葉に対して意識を高めている様子が分かる。このようにして、生徒は単元を通した振り返りをしながら、考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚し、学びの深まりを実感している様子が見られた。

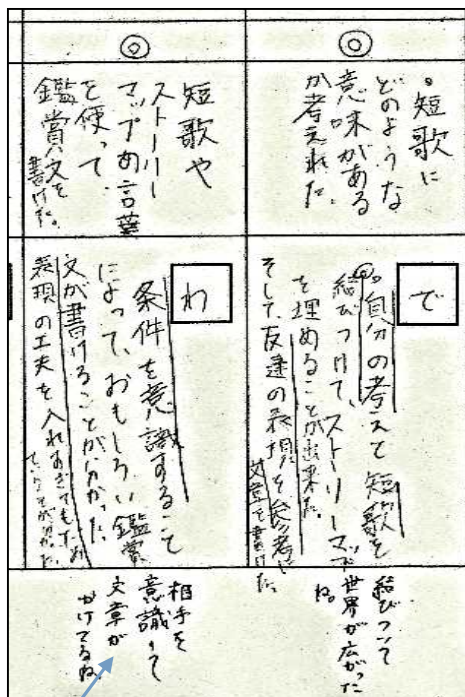


図13 1単位時間毎の振り返り

教師による、生徒の振り返りに対しての学びの価値付け

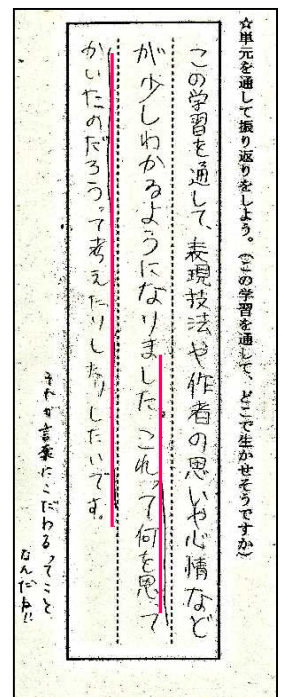
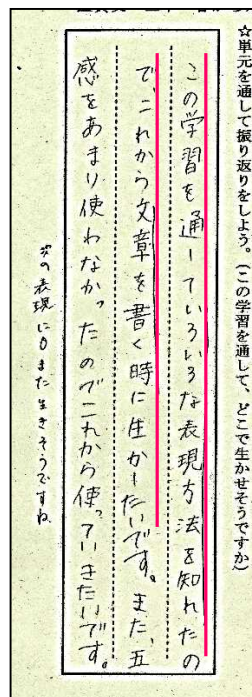


図14 単元を通した振り返り

(3) 検証授業 I における生徒の表現例

五首から共感した短歌一首を選び、思考ツール「ストーリーマップ」を用いて、考えを広げたり深めたりしながら、毎時間の「学びをつなぐ振り返りシート」で学びの成果を確認し、創作型鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」を書くことができた (図15)。

みちのくの母のいのちも一目見ん
 一目見んとぞただにいそげる

私(一人称)は心の中でぎくしやくしてあせている。車で東北に向かっている。黒い雲のかかった雷の鳴る空の中を。仕事終りのことだった。親戚から電話があり、「母がたおれた」とつげられた。頭がまっ白になった。広い雪原にほうり出され雪だらけのところに入るようだった。母の命はもう長くはない。旅立ちかおからないえうだ。とにかく、急いで車に乗り東北の奥家へ向かった。

自分の知識や経験と結び付けている

作者の心情

表現技法

短歌の言葉を使っている

図15 鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」生徒作品例

(4) 検証授業Ⅰの成果と課題

ア 成果

- (ア) 単元の学習課題に①単元の指導事項，②着眼点や思考方法，③単元を通した言語活動の三つの要素を位置付けることで，生徒は単元を通してどのような力を身に付けるかが明確になっており，学びの方向性を見通すことができた。
- (イ) 言語活動のモデルを提示することで「鑑賞のポイント」に気づき短歌を読み深めることができていた。また，このポイントがあることで，どのように考えればよいか明確になり自分の考えを鑑賞文「三十一音から始まるドラマ」に表現することができた。
- (ウ) 思考ツール「ストーリーマップ」を活用して，思考の流れを整理し，考えの形成を図ることができた。また，対話の中で自分の考えを広げたり深めたりしながら，考えを再形成する生徒も多くいた。
- (エ) 「学びをつなぐ振り返りシート」を単元の導入から終末まで，活用したことにより，生徒は学びの方向性を見通すことができた。また，観点を明確にして毎時間生徒が振り返りを行うことで，学びの成果や疑問に気づき，教師も生徒の振り返りに対して価値付けをし，学びを見届けることができた。

イ 課題

- (ア) 単元の学習課題に基づく自分の「問い」を生徒に立てさせることができなかった。自分の「問い」を立てることで，生徒は学びを自分のものと捉え，主体的に向かうことができるのではないかと考える。生徒に自分の「問い」を立てさせることで，考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し，学びの深まりを実感させるための手立てを今後考える必要がある。
- (イ) 言語活動を通して生徒が身に付ける力を理解し，単元の学習課題と結び付けた言語活動のモデルを提示する際には，生徒に評価の観点を明確に示すなどして，言語活動に必要感・必然性を更にもたせることができるよう工夫する必要がある。
- (ウ) 検証授業Ⅰでは，生徒が1単位時間又は単元を通した学びを振り返る際に，教師が振り返りの観点を示した。教師が観点を示すことで，生徒は観点に基づく的確な振り返りができたが，振り返りの観点が一つに絞られてしまい，振り返りが次の学びに生かされていない生徒もいた。そこで，指導のねらいに応じて振り返りの観点を生徒に選択させ，振り返りの内容を一層充実させていく必要があると考えた。

(5) 検証授業Ⅰの課題を踏まえた検証授業Ⅱの留意点

上記に示した課題を踏まえ，検証授業Ⅱは次の3点に留意したいと考えた。

- 学びの方向性を見通すための単元の学習課題を設定する。具体的には，単元の学習課題の中に，①単元の指導事項，②着眼点や思考方法，③単元を通した言語活動を位置付けて単元の学習課題を設定し，生徒がその学習課題を基に，自分の「問い」を立てることで学びの方向性を見通すことをねらいとする。
- 単元の学習課題の解決につながる必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫を行う。そこで，育成を目指す資質・能力につながる具体的な言語活動のモデルを生徒に示すことで，必要感・必然性をもたせる。
- 学びの価値付けができる振り返りを一層充実させていく。「学びをつなぐ振り返りシート」を改善し，生徒が自分で「問い」を立て，その「問い」を基に振り返りを行う。

5 検証授業Ⅱの実際と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要

ア 検証授業Ⅱの単元名及び実施学年等

単元名	平家物語を生きた人々と対話をしよう
教材名	「平家物語」(『現代の国語 2』三省堂)
言語活動	登場人物の会話文や叙述を根拠として人物像を捉え、人物評「平家物語のかお」を書く
対象	南大隅町立根占中学校第2学年2学級において実施
実施時期	令和元年12月3日～9日

イ 言語活動設定の理由

本単元で扱う平家物語は軍記物語でありながら、平氏と源氏、それぞれの人間模様を描いた作品である。その人間模様は、数百年の時を経て現代を生きる私たちにも通じるものがある。そこで、「敦盛の最期」の場面における「熊谷次郎直実」と「敦盛」の心情を想像して人物像に迫り、登場人物についてどう評価するか自分の考えを形成し、人物評「平家物語のかお」として書く言語活動を取り入れる。この言語活動を通して、場面に描かれた人物像に迫り、現代の私たちと比較して、共通点や相違点に気づき、その人物に対してどう感じたのかを考えたり、登場人物の生き方を理解することでこれからの自分の生き方を見つめ直したりできるのではないかと考えた。人物評「平家物語のかお」を書くためには、まず、古文の読解が必要である。1年生のときに習得した古文の知識を活用し、現代仮名遣いや古文のリズムを意識した音読をし、主語を明確にして読み進めていく。次に、登場人物の人物像を的確に捉えることが必要である。登場人物の会話文や叙述に着目し、そこに込められた心情について、根拠を明確にして理解し、人物像を捉えられるようにしたい。最後に、捉えた人物像に対し、自分の知識や経験と結び付けたり関連付けたりして、自分の考えをもつことも必要である。また、考えの形成を支えるためには、語彙の充実が必要不可欠であると考えた。そこで、語彙を収集して的確に選択させるために、生徒がこれまで習得してきた語彙に加えて、自分の考えを適切に伝える語彙を新たに探し、その意味を知り活用する場を設けることで、語彙の広がりも感じさせたい。

ウ 単元における評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
○ 音読を通して七五調のリズムのよさや和漢混交文の歯切れのよさを味わおうとしている。	○ 平家物語を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付けたり関連付けたりして、自分の考えを広げたり深めたりしている。	○ 作品に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物の思いを想像している。 ○ 抽象的な概念を表す語句の量を増やし、類義語について理解し、文章の中で使うことを通して語彙を豊かにしている。

エ 評価規準を基にした判断基準の作成

評価規準	「敦盛の最期」を中心とした、「熊谷次郎直実」と「敦盛」の人物像や心情を、会話文や叙述に着目して理解し、自分の知識や経験と結び付けたり関連付けたりして、人物評「平家物語のかお」を書くことができる。
------	---

評価の場面	<ul style="list-style-type: none"> 5時間構成の第3・4時で人物評ボックスを書き、他者と交流して考えを広げたり深めたりする場面 5時間構成の第5時で人物評「平家物語のかお」を書く場面
評価の対象	<ul style="list-style-type: none"> 思考ツール「人物評ボックス」 人物評「平家物語のかお」 毎時間行う「学びをつなぐ振り返りシート」
判断の要素	<ol style="list-style-type: none"> ① 会話文の引用 ② 叙述を根拠に登場人物の心情を比較し、人物像を捉える。 ③ 人物への評価 ④ 人物を端的に表現する見出し（十二字程度）
尺度	判断基準
B	<ol style="list-style-type: none"> ① 共感した人物を選び、その人物を端的に表す会話文を選んでい ② 人物を捉えることができる叙述を根拠とし、登場人物を比較して人物像を捉えている。 ③ 登場人物について、自分の評価を表現している。 ④ 十二字程度で人物像を表現している。 (① ____ ② ____ ③ _____ ④ _____)
【予想される生徒の作品例】	
<p>③ 「<u>親心にあふれる武士 直実</u>」</p> <p>① 「<u>助けまいらせん</u>」思わず口に出た直実だった。② <u>我が子小次郎と敦盛を重ね、殺すことを悩み苦しんだ直実</u>。親として思いが溢れたのだろう。敦盛は、その親心を知ってか、知らずか敦盛は、自分の死に対して、潔かった。③ <u>直実は、武士としては失格だったのかもしれないが、一人の親として、子を思う心を持ち続けた人物として共感できる</u>。直実は、武士であるとともに「人間 直実」として生きた武士である。</p>	
A	<p>(判断基準Bに加えて)</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 会話文に込められた思いを捉えている。 ② 根拠を基に登場人物を比較し、その違いを明確にして人物像を捉えている。 ③ 登場人物について、自分の知識や経験と結び付けたり関連付けたりして自分の評価を表現している。 ④ 十二字程度で言葉を吟味し、端的に人物像を表現している。 (① ____ ② ____ ③ _____ ④ _____)
【予想される生徒の作品例】	
<p>④ 「<u>高潔な武士 敦盛</u>」</p> <p>① 「<u>とくとく首を取れ</u>」敦盛のセリフには武士としての誇りが込められていた。② <u>敦盛は、最期まで命乞いはしなかった。たとえ、直実に命を助けると言われても、敦盛は武士とし誇り高く死ぬことを選んだ。直実の親心は、敦盛を殺そうとして心が揺れ動き、感情をあらわにしてしまった姿に表れている</u>。敦盛は十七才。やりたいことや夢もたくさんあったはずだ。③ <u>もし、私が敦盛のように、殺されそうになったらどうしただろう？きっと、泣いて命乞いをするか、逃げ出す方法を考えただろう。武士道を貫いた人物だと捉える</u>。武士として生き、武士として最期を迎えた敦盛は、生涯、武士であり続けた男である。</p>	

オ 検証授業Ⅱの視点

ア	学びの方向性を見通すための単元の学習課題と自分の「問い」の設定 ・ 育成を目指す資質・能力につながる学習課題と自分の「問い」の設定
イ	必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫 ① 評価の観点を明確にした言語活動のモデル提示と活用 ② 思考の流れを整理し、考えの形成を図るための思考ツールの研究
ウ	学びの価値付けができる振り返りの工夫 ・ 「学びをつなぐ振り返りシート」の活用

カ 単元の指導計画（全5時間）

過程	活動のねらい	主な学習活動	時数	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○ 言語活動のモデル人物評「小さな手袋のかお」を見て、学びの方向性を見通す。 ○ 「平家物語」について理解する。 ○ 「平家物語」を音読し内容を理解する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 教師が提示した言語活動のモデル人物評「小さな手袋のかお」を見て、人物評「平家物語のかお」を書く上での読みの視点を確認する。 2 学びの方向性を見通す。 3 「平家物語」について説明を聞き、時代背景や概要を理解する。 4 現代仮名遣いに気を付けて音読をする。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 言語活動のモデル人物評「小さな手袋のかお」を提示し、読みの視点を示す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>読みの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 会話文の引用 ・ 叙述を根拠にした心情や人物像 ・ 人物への評価 ・ その人物を端的に表現する <p style="text-align: right;">見出し（十二字程度）</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「学びをつなぐ振り返りシート」を活用し、学びの方向性を見通させる。 ・ 和漢混交文のリズムを捉えた音読ができるよう支援する。 ・ 最初の読みでの人物像を捉えさせる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既習教材「小さな手袋」を使い、人物評ボックスを理解する。 ○ 人物評ボックスを用い、人物像を捉え自分の考えをもつ。 ○ 人物を表す語彙を集める。 ○ 交流し、考えを広げたり深めたりする。 	<ol style="list-style-type: none"> 5 既習教材「小さな手袋」を使い、人物評ボックスを理解する。 6 人物評ボックスを用いて人物像を捉え、自分の考えをもつ。 7 辞書を使い、人物を表す語彙を集める。 8 人物評ボックスを用いて交流し、考えを広げたり深めたりする。 	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読みの視点を基にした、人物評ボックスを提示する。 ・ 既習教材「小さな手袋」を用いて、思考ツール「人物評ボックス」の使い方を確認させる。 ・ 「敦盛」、「熊谷次郎直実」、それぞれの会話文や叙述に着目しながら、人物評ボックスを書かせる。 ・ 人物の評価を表す語彙について、類義語やその他の語彙がないか辞書で確認させる。 ・ 人物評ボックスを用いて交流させて、考えを広げたり深めたりできるよう支援する。

終 末	○ 交流を通し広がり深まったりした人物評ボックスを用いて、人物を選び人物評「平家物語のかお」を書く。	9	人物評ボックスを用いて、人物評「平家物語のかお」を書く。	1	<ul style="list-style-type: none"> 人物評ボックスを参考にして人物評「平家物語のかお」を書かせる。 読みの視点を基にした、人物評「平家物語のかお」を書くときの条件を提示する。 「学びをつなぐ振り返りシート」を活用して、学びを振り返り、考えの変容を自覚するよう促す。
--------	--	---	------------------------------	---	--

(2) 検証授業Ⅱの指導の工夫と考察

ア 学びの方向性を見通すための単元の学習課題の設定

- 育成を目指す資質・能力につながる単元の学習課題と自分の「問い」の設定
本実践では単元の学習課題を3要素で構成することにした。本単元の学習課題は以下のとおりである。

①敦盛の最期を読んで、考えたことを、自分の知識や経験と結び付け、考えを広げたり深めたりして、②会話文や叙述に着目し人物像を捉えます。捉えた人物像を参考に③人物評「平家物語のかお」を書きましょう。

(①指導事項, ②着眼点や思考方法, ③言語活動)

生徒は、単元の学習課題を基に「敦盛の人物像にあった語彙を使ってみる」、「自分の知識や経験を生かして直実の心情を捉えよう」というような自分の「問い」を立てることができていた。このことから、単元の学習課題を3要素で構成し、生徒と教師が育成を目指す資質・能力を共有することで学びの方向性を見通すことができた。

イ 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫

(ア) 評価の観点から明確にした言語活動のモデル提示と活用

本実践では、教師が生徒の思考を妨げないようモデルは既習教材「小さな手袋」を用いた人物評「小さな手袋のかお」を提示した(図16)。

生徒は、言語活動のモデルから「読みの視点(評価の観点)」に気付くことで「私もこんな人物評を書いてみたい」、「こんな言語活動をしたら、考えが伝えられそうだ」と感じ、言語活動に必要な感・必然性をもたせることができた。具体的なモデルと「読みの視点(評価の観点)」を提示することで、生徒は言語活動を通して、どのような力を身に付けられるかが明確になり、学びへの意欲を継続することができていた。

人物評「平家物語のかお」 『平家物語』 名前


「会いたい。会ってもいいですか」

まだ幼く、祖父の死を体験し大きな悲しみを経験したシホは、おばあさんに祖父を重ね、おばあさんのところに行かなくなつた。時を経て、おばあさんのところに行かなくなつた。おばあさんの愛情や気持ちに触れ、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。思いが込められた二半シホは、かすかなおえつが漏れ出した。

「小さな手袋のかお
シホを語る」

おばあさんは、きつとシホを思い、喜ぶ顔が見たくて、不自由な手で手袋を編んだのだらう。

おばあさんへ
届かぬシホの思い



今、おばあさんの気持ちが分かる。だからこそ、会いたい。そして謝りたい。お礼が言いたい。私が経ち分ること、シホの気持ちがある。シホが、今の私に、この思いは伝わらない。これも切ない。

自分の念ど当時の自分、おばあさんへ気持ち伝えることが叶わない。シホに私は共感した。

おばあさん、いつでもシホのことを考えていた。それなのにシホは、自己中心的な行動をとってしまっていた。

人物評「平家物語のかお」の条件	推敲
1 人物を表す会話文を抜き出している。	
2 叙述を根拠に登場人物の心情を比較し、相違点を明確にして人物像を書いている。	
3 四段落構成とし、四段落目には人物への評価を書いている。	
4 人物を端的に表現する見出しをつけている。(十二字程度)	

図16 言語活動のモデル

(イ) 思考の流れを整理し、「考えの形成」を図るための思考ツールの研究

本実践では、思考ツール「人物評ボックス」を活用した(次頁図17)。可視化して思考の流れを整理するねらいがある。思考ツール「人物評ボックス」は、1 会話文、2 根拠となる叙述、3 そのときの心情や人物像、4 人物への評価、5 人物を端的に表す言葉の五つのボッ

クスが設けてある。生徒は文章を読み深めながら、思考ツールの各ボックスに、登場人物の心情やその根拠となる叙述、人物について評価した自分の考えを記述した。また、人物像を端的に表現するためには、語彙の充実が必要不可欠である。そこで、既習の語彙以外にも新たに語彙を習得し、語彙を活用する場面を設定することで、人物像を一層端的に伝えることができると考え、人物を表す語彙プリント(図18)や辞書等を活用し、語彙の習得を図った。

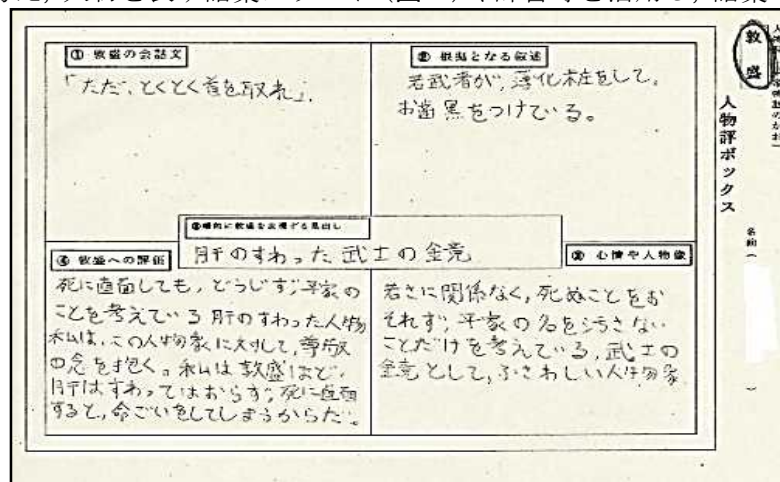


図 17 人物評ボックスの活用例

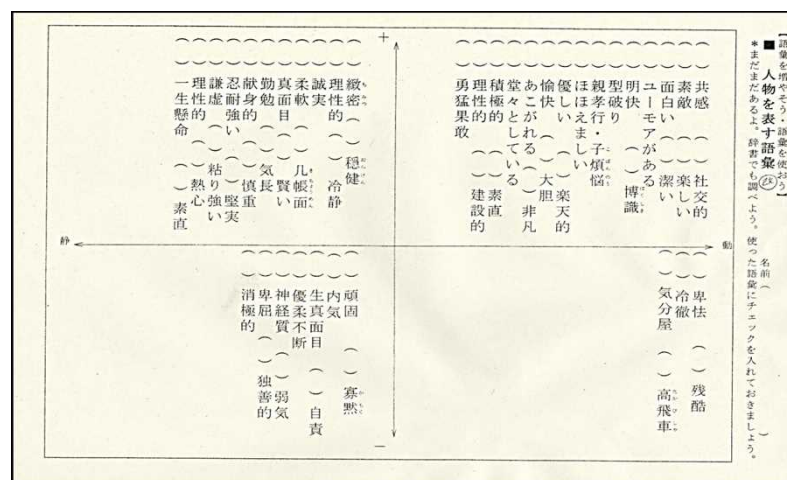


図 18 人物を表す語彙プリント

ウ 学びの価値付けができる振り返り

- 「学びをつなぐ振り返りシート」の活用

生徒は、授業の終末に「学びをつなぐ振り返りシート」を活用し、毎時間観点を明確にして振り返りを行い、学びの価値付けを行った。観点を明確にした振り返りとは、自分の立てた「問い」に対し、「分かったこと」、「できるようになったこと」等といった観点を生徒が選び、学びを振り返ることである。例えば、第3時では、「(人物への評価のボックスに) 評価の項目を書きこむのがあまりうまくいかなかった。」と振り返りをした生徒の記述があった。教師は、この生徒が登場人物への評価のボックスについて具体的に理解できていないと判断し「自分は(その人物に対して) ○○と思うという視点で(その人物への) 評価が書けたらいいね」とコメントを記した。すると、次時の生徒の振り返りには、「直実の人物像について考え、自分の評価ができた。」と記述していた。このように、生徒が学びの成果や疑問を振り返るようになり、一方、教師は生徒の学びの成果や疑問に対して、価値付けや助言を行えるものとなった(次頁図19)。

師走 9日	師走 6日	師走 5日	師走 4日	師走 3日	日付
5 共感した登場人物について、人物評「平家物語のおお」を書く	4 人物評ボックスを用いて「直実」の人物像に迫り、評価をしよう	3 人物評ボックスを用いて「教盛」の人物像に迫り、評価をしよう	2 人物評ボックスの使い方を理解しよう。	1 「平家物語」について理解を深め、単元の見直しをしよう	目 標
今までの学習で学んだことを生かして「平家物語」のおおを書こう	人物評ボックスを用いて「直実」の人物像に迫り、評価をしよう	人物評ボックスを用いて「教盛」の人物像に迫り、評価をしよう	人物評ボックスの使い方を理解しよう。	人物評ボックスの使い方を理解しよう。	自分の問い
○	○	○	○	○	◎○△で評価
その評価の理由 ・わかったよ ・できた	その評価の理由 ・わかったよ ・できた	その評価の理由 ・わかったよ ・できた	その評価の理由 ・わかったよ ・できた	その評価の理由 ・わかったよ ・できた	その評価の理由 ・わかったよ ・できた
コメント欄	コメント欄	コメント欄	コメント欄	コメント欄	コメント欄

教盛の最期を読んで、考えたことを、登場人物の会話文や叙述に着目して、自分の知識や経験と結び付けて、人物像を捉えます。考えを広げたり深めたりして、人物評「平家物語のおお」を書きましよう。

図 19 1 単位時間毎の振り返り

単元を通した振り返りでは「最初は何もかも理解することが難しく困っていたけれど、回数を重ねるたびに友達と話し合う機会などがすごく役に立って、最後は理解することができたし、簡単に進めることができた。」という記述からも、生徒が考えの変容(考えの広がりや深まり)を自覚している様子が分かる。加えて、「学習を重ねていくうちにどんどんスラスラ書き込めるようになっていき、日々の学習が次に生かされていることを実感した」という生徒の記述から、学びのつながりを実感している様子が見られた(図20)。

このような姿から、生徒は、国語科の授業を通して、学びが深まっていることを実感している様子が見られる。

☆単元を通して振り返りをしよう。本単元の学びが、学校や実生活のどんな場面で生かせるか

最初は何もかも理解することが難しく困っていたけれど、回数を重ねるたびに友達と話し合う機会などがすごく役に立って、最後は理解することができたし、簡単に進めることができた。

日々の学習が次に生かされていることを実感した。

☆単元を通して振り返りをしよう。本単元の学びが、学校や実生活のどんな場面で生かせるか

今回の単元を振り返って、最初は何かも理解することが難しく困っていたけれど、回数を重ねるたびに友達と話し合う機会などがすごく役に立って、最後は理解することができたし、簡単に進めることができたので、すごくうれしかったです。

自分の変化に気づいたこと、これは大きなね。

図 20 単元を通した振り返り

(3) 検証授業Ⅱにおける生徒の表現例

思考ツール「人物評ボックス」を活用し、「学びをつなぐ振り返りシート」で学びをつなぐことで、人物評「平家物語のかお」を次のように表現することができた（図21）。


平家物語のかお

戦国時代、平氏と源氏の戦いで源氏方の熊谷次郎直実は、自分の息子と敵である平教盛を重ね、涙を流しながら彼の首に刀を立てた。


教盛の親のとき考えると、助けたい気持ちがあるが、敵であるから殺さなければならぬ。奥のうちに、たのたの。

おはれ、
助けたてまつらばやい。

なさけ深い
武士とは



直実には息子がいた。だからこそ教盛のことを殺したくはなかったのだから。一人の親として、しかし、教盛に「とくしく首を取れ」と言われ、



した。切った姿に感動

相手は大將軍で、自分は一武士であるということに気がついたのたろう。私は思った。私が殺されたら、両親はどれくらい悲しむのか。そう考えると、直実の気持ちがよく分かる。直実のなさけ深さと、気も動転して、泣きながら教盛の首を切った姿に感動した。

引用した人物の
会話文

叙述を根拠に双方を比較し、人物像を書いている

語彙を広げ、その人物を端的に表現する見出しを付けている

自分の知識や経験と結び付けて、人物の評価をしている

図 21 人物評「平家物語のかお」 生徒作品例

(4) 検証授業Ⅱの成果と課題

ア 成果

- (ア) 単元の学習課題に、3要素を位置付けることで、生徒は自分の「問い」を立て、学びの方向性を見通すことができた。そのため、主体的に学ぶ生徒の姿につながった。
- (イ) 必要感・必然性をもたせる言語活動では、新聞記事を導入時に使用し、興味・関心を引き出していった。育成を目指す資質・能力につながる具体的な言語活動のモデルを提示することで、生徒の「書いてみよう」、「やってみよう」という意欲が高まっている姿が見られた。モデルが既習教材であったことも、大きな役割を果たしていた。生徒から「先生の平家物語のかおを見たいです」という声が挙がった。これに対し、「でも、先生の平家物語のかおがあったら、自分のかおが書けなくなる。自分の人物評が書きたい。」という生徒もおり、この言葉に皆が賛同していた。生徒は言語活動のモデルを通して、「自分も書いてみたい」という必要感・必然性につながり、主体的に取り組む姿が見られた。
- (ウ) 思考ツールを活用することで、生徒は思考の流れを整理し、叙述に着目しながら、根拠を明確にして考えの形成を図ることができていた。
- (エ) 「学びをつなぐ振り返りシート」の活用は、生徒が1単位時間又は単元を通した学びを振り返るのに有効であると感じた。生徒が毎時間の学びを振り返り、学びの成果や疑問を言語化することで学びを客観的に捉えている様子が見られた。毎時間振り返りを行ってきたことで、生徒は学びの深まりを実感し、学習を始める前の自分と比較し、その変容に気付いている様子も見られた。また、生徒の振り返りに対して、教師も学びの価値付けをしながら、今回の手立ては適切だったかを振り返り、指導の改善に役立てることができた。

イ 課題

- (ア) 生徒の「問い」の立て方に課題がある。本実践で生徒が立てた自分の「問い」は、言語活動の活動のみに目を向けたものになりがちであった。これは、教師が生徒に示した学習目標が活動を中心にしたものであるためではないかと分析している。生徒が学びの見通しをもち、作品の本質に迫った自分の「問い」をどのように立てさせていくかが課題である。
- (イ) 必要感・必然性をもたせる言語活動について、更に研究を重ねていく必要がある。教師が、育成を目指す資質・能力とその資質・能力を身に付けた具体的な生徒の姿を明確にしておくこと必要がある。
- (ウ) 語彙を広げ、活用する場面設定をしていくことが重要である。語彙は知っていても、活用しなければ語彙の充実にはならない。生徒が語彙を広げたり、活用したりする機会や場면을意図的に計画することが重要であると感じた。
- (エ) 「学びをつなぐ振り返りシート」も、改善が必要である。具体的には、振り返りシート1枚が学びの履歴になるように工夫することである。そのためには、生徒が立てた「問い」が、学びが深まる度に、更新されていくような活用を考えていかななくてはいけない。また、国語科の学習が授業の中だけで完結するのではなく、どのようにその他の学びや実生活とつないでいくのか、そのためにはどのような振り返りが重要かを考えていきたい。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 単元の学習課題に3要素を用いて設定することで、生徒と教師は育成を目指す資質・能力を共有することができ、生徒は自分の「問い」を立てて学びの方向性を見通すことができた。
- (2) 必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫として、教師が生徒に言語活動のモデルを提示した。育成を目指す資質・能力を身に付けることにつながる具体的な言語活動のモデルを提示することで、生徒は言語活動に必要な感・必然性をもち、学びに対する意欲を継続させて取り組んでいた。また、思考ツールを活用することで、思考の流れを整理し、根拠に支えられた考えの形成を図りながら言語活動の目的や価値を見だし、学びに取り組む姿も見られた。
- (3) 振り返りの時間を確実に設け、1単位時間又は単元を通した学びを生徒に振り返らせた。生徒は、「分かったこと」や「できるようになったこと」等の観点を自分で選択し言語化することで、客観的に学びを振り返ることができていた。また、個人の振り返りを学級全体で共有し、学びの価値を全体で実感することもできた。教師も、生徒の振り返りに対し、価値付けや助言を行うことで、次時の指導の在り方を客観視することにつながったと考える。また、単元の最後の振り返りでは、生徒が考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し、学びの深まりを実感している姿も見られた。

2 研究の課題

- (1) 今回の検証授業は、第2学年の「読むこと」の領域を中心に行った。今後は継続して、他学年や他の領域の実践していきたい。そのためには、教師が生徒の学ぶ姿を具体的に想像し授業改善を行うことが重要である。今後も、言語活動のモデルを活用する実践の開発が必要である。
- (2) 考えの形成を図るための思考・判断・表現を支えるには、語彙の習得・活用も必要不可欠である。生徒が培ってきた語彙を、広げたり深めたりするための環境や場面作りを意図的に設定していく必要がある。
- (3) 生徒の「問い」の立て方について更に研究していく必要がある。本研究で生徒が立てた「問い」は、言語活動のみに目を向けたものになっていた。今後は、単元の学習課題とのつながりを意識した自分の「問い」を立てることができるようになる手立てを考えていく必要がある。
- (4) 単元を通して身に付けた力を他教科等の学習や実生活につなぐために、教師は、学びが生かせる場面を把握し、国語科の学習と実生活とを関連付けた学習計画を立てる必要がある。

〈参考文献〉

- | | | | | |
|-------------------------|----|--|-------|--------------------|
| ○ 黒上晴夫
小島亜華里
泰山裕 | 著 | 『シンキングツール
—考えることを教えたい—』 | 2012年 | NPO法人学習
創造フォーラム |
| ○ 佐藤佐敏 | 著 | 『思考力を高める授業 作品を解釈するメ
カニズム』 | 2013年 | 三省堂 |
| ○ 田近洵一
鳴島甫 | 著 | 『中学校・高等学校 国語科教育法研究』 | 2013年 | 東洋館出版社 |
| ○ 田村学 | 著 | 『授業を磨く』 | 2015年 | 東洋館出版社 |
| ○ 寺井正憲
伊崎一夫 | 編著 | 『発問—考える授業, 言語活動の授業におけ
る効果的な発問—』 | 2015年 | 東洋館出版社 |
| ○ 藤森裕治
宮島卓朗
八木雄一郎 | 編著 | 『交流—広げる・深める・高める—』 | 2015年 | 東洋館出版社 |
| ○ 藤井千春 | 著 | 『アクティブ・ラーニング授業実践の原理
迷わないための視点・基盤・環境』 | 2016年 | 明治図書 |
| ○ 澤井陽介 | 著 | 『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」
の授業改善』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 田村学 | 編著 | 『カリキュラム・マネジメント入門』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 奈須正裕 | 著 | 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 松村英治
相馬亨 | 著 | 『「学びに向かう力」を鍛える学級づくり』 | 2017年 | 東洋館出版社 |
| ○ 飯田和明
上谷順三郎
児玉忠 | 編著 | 『文学—主体的・対話的に読み深める—』 | 2018年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | | 『中学校学習指導要領解説 総則編』 | 2018年 | 東山書房 |
| ○ 文部科学省 | | 『中学校学習指導要領解説 国語編』 | 2018年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | | 『小学校学習指導要領解説 国語編』 | 2018年 | 東洋館出版社 |
| ○ 文部科学省 | | 『平成30年度全国学力・学習状況調査結果』 | 2018年 | |
| ○ 鹿児島市立
伊敷中学校 | | 『新しい時代を切り拓く資質・能力を身に付
けた生徒の育成』 | 2017年 | |
| ○ 鹿児島市立
伊敷中学校 | | 『「深い学び」への挑戦—授業実践事例集—』 | 2018年 | |
| ○ 鹿児島市立
山下小学校 | | 『未来の創り手の求められる資質・能力を育
成する授業づくり—主体的・対話的で深い
学びの実現を通して—』 | 2018年 | |
| ○ 鹿児島市立
田上小学校 | | 『共に学び 未来に創るⅡ—学びに向かう
力を育てる指導を通して—』 | 2018年 | |

長期研修者 [中村 恵理]

担当所員 [小野 修]

【研究の概要】

本研究は、国語科の学習指導において、「学びをつなぐ振り返りシート」を学習過程に位置付け活用することで、生徒が考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚でき、学びの深まりを実感する国語科指導の在り方について研究したものである。

具体的には、まず、国語科の学習で学びの方向性を見通す単元の学習課題を設定した。次に、必要感・必然性をもたせる言語活動の工夫を行った。さらに、学びの価値付けができる振り返りを通して、生徒が一単位時間又は単元を通した学びの成果を確認できるようにした。また、教師もその振り返りに対して、学びの価値付けをすることで、生徒の学びを見届けることができ、指導の改善や手立ての工夫を図った。

その結果、生徒は学びの方向性を見通すことができ、必要感・必然性を持ちながら言語活動に取り組み、観点を明確にして振り返ることによって考えの変容（考えの広がりや深まり）を自覚し、学びの深まりを実感している姿が見られた。このような研究を通して、学びの深まりを実感する学習指導の在り方を明確にすることができた。

【担当所員の所見】

本研究は、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、国語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した実践研究である。研究の中核には、「深い学び」を学習過程における「学びの深まり」と捉え、生徒が学びを価値付けし、考えの変容を自覚するための具体的な手立て（指導の工夫）を位置付けてある。

本研究の価値は、単元の学習過程に①単元の学習課題と「問い」の設定、②必要感や必然性をもたせる言語活動、③学んだことを価値付けできる振り返りを有機的に関連付けながら生徒が「学びの深まり」を実感する国語科学習の実現を目指したところにある。とりわけ、本研究で開発・活用した「学びをつなぐ振り返りシート」は、生徒が単元の学習を見通し、毎時間の学習を価値付けしながら、単元全体を振り返り、新たな学びに向かうPDCAサイクルを有効に機能させている。検証授業における振り返りシートに記述した生徒の言葉は、国語科の学習を通して「学びの深まり」を実感する生徒の姿そのものである。

今後は「学びをつなぐ振り返りシート」の充実・改善を図りながら、単元の学習課題と生徒の立てる自分の「問い」の関係を明確にし、各領域で言語活動のモデルや思考ツールの開発に取り組むことで、本研究が更に深化・発展することを期待している。